

報告

カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーへの 理解を深める履修サポートツールの開発について

— スポーツ健康科学部の事例をもとに —

林 龍 徳

要 旨

近年、学生がディプロマ・ポリシーを理解し、適切な科目履修を行う重要性が、大学関係者の中では広く浸透しつつあるが、多くの学生は受講した科目を通じて、どのようなディプロマ・ポリシーの力量が身につくかについて、十分に理解ができていない状況である。

立命館大学スポーツ健康科学部では、特色ある教育プログラムに対して予算措置を行う「立命館大学 教育の質向上制度」を活用し、新たに科目履修を進めるためのウェブサポートツールを開発した上で2013年度より運用した。開発したツールを通じて、学生がそれらの理解を深め、円滑な履修計画を策定できること、ひいては将来目指すべき進路のイメージづくりにつなげることを目指している。

本稿の目的は、この履修サポートツールの開発趣旨、経緯、機能等の概要をまとめ、2014年度以降に残された課題を提示することで、今後のサポートツールの改善や運用上の工夫に関する示唆を与えることである。

キーワード

スポーツ健康科学、履修サポートツール、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、学部教職員

1 はじめに

「学士課程教育の構築に向けて（答申）」（2008年12月文部科学省中央教育審議会）は、学士課程教育の質の維持・向上に向けた各大学における「実効性ある改革の必要性」を提示し、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーを明示することの重要性を指摘している¹⁾。さらに、2011年4月の学校教育法施行規則改正により、各大学の教育情報の公表が義務付けられ、「大学は、（中略）教育上の目的に応じ学生が修得すべき知識及び能力に関する情報を積極的に公表するように努めるものとする。」（第172条の2 第2項）が新たに規定された。

このような状況のもと、学内の「立命館大学 教育の質向上制度」²⁾の申請にあわせて、2011年11月にスポーツ健康科学部の副学部長を責任者とした学部教職員チームを編成し、上述の3つのポリシーについて公開するのみならず、それらを学部学生に浸透させる取り組みを検討することとなった。この検討の結果、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーへの理解を深める履修サポートツールの開発を行うこととなった。

本稿では、その履修サポートツール開発の趣旨、経緯、機能等の概要をまとめ、2014年度以降に残された課題について整理することにより、さらなる内容上、運用上の工夫改善に向けた手がかりを提供する。そのため、まず「2 取組みの背景」において、上述の学部教職員チームの検討の経緯を説明する。次に「3 スポーツ健康科学部学生の特徴」において履修サポートツールの設計にかかわる学部学生の特徴について触れる。その後、「4 自分創造サポートツール SPO-KEN LEARNING GUIDE」³⁾において履修サポートツールの機能等の説明を行い、「5 今後の課題」において課題および展望を整理する。

2 取組みの背景

スポーツ健康科学部では履修指定科目である小集団科目やキャリア形成科目、その他新入生オリエンテーションなど、多様な機会において学部教員から学部の人材育成目的、3つのポリシーおよび教育目標等⁴⁾について説明を行っている。そのため、他学部と比べて教育目標を理解している学部学生が多い⁵⁾。ただし、第1期生を対象とした学部学生アンケート⁶⁾によると課外活動であるクラブ・サークル活動に比べ、正課における科目の履修が将来の進路に向けた力量につながっている実感が少ない⁷⁾状況であることがわかった。また、後に示すカリキュラム・ポリシーおよびディプロマ・ポリシーにおいて総合的・学際的教育とその成果を掲げているにもかかわらず、学部学生が関心を示す学問分野や希望進路において偏りが見られた⁸⁾。そのことから、学部の学びを理解した上で、学部学生が履修を予定している科目や既に履修した科目によって身につけることができる知識・能力（以下、「力量」という）が、ディプロマ・ポリシーに掲げる力量にどのようにつながっていくのかを、当事者である学部学生のみならず学部教職員も共通に確認できる機会が重要であるとの認識に至った。同時に入学時のみだけでなく進級・ゼミ選択等のタイミングで継続的に学部学生に学部学修のイメージを定着させることが最優先課題であると確認された。それらを踏まえて、学部学修の概要を理解した上で、4年間で履修する科目の総体から、ディプロマ・ポリシーで提示している力量がどの程度身につくかをイメージさせることができる新たなツールの開発を2013年度開講に向けて進めることとなった。学部学生が在学中の4カ年間継続してセルフチェックを行い、将来に向けた自己の成長につなげることを目指して、このツールは「自分創造サポートツール SPO-KEN LEARNING GUIDE」（以下、「本ツール」という）と名付けられた。

3 スポーツ健康科学部学生の特徴

ここで本ツール開発にあたって、前提となる対象学生の特徴を整理しておきたい。ツールの検

討を始めた 2011 年度時点において、2011 年 4 月に実施したスポーツ健康科学部 2 年次生を対象とした学部学生アンケート⁶⁾を参考にした。その中で、社会人として身につけてほしい 9 項目の力量に対して 4 段階の自己評価を求めたところ、以下のような結果が出た(表 1)。

①とてもそうである、②そうである、といった肯定的な回答が 60%以上のものは、項目 1「計画性」:75.5%、項目 3「社交性」:67.9%、項目 4「情報収集力」:60.4%、項目 5「倫理観・マナー」:87.3%、項目 7「探究心」:70.3%、項目 9「学問への関心」:87.7%であり、肯定的な回答が 60%を下回るものとして、項目 2「勤勉性」:41.5%、項目 6「科学的な視点」:50.9%、項目 8「英語発信力」:34.0%であった。加えて、同アンケートにより、クラブ・サークル活動に所属しているものは 79.7%(翌年度 3 年次生 72.9%、翌々年度 4 年次生 67.5%)であり、高い割合であることがわかる⁹⁾。アンケートの結果において「計画性」の自己評価が高い理由として試合等に向けて計画的に鍛錬を行っていること、「社交性」「倫理観・マナー」が高い理由として、集団で活動する機会が多いこと、「情報収集力」「探究心」「学問への関心」が高い理由として、自らの活動と学問分野が実践と理論の関係で密接にかかわることが原因であると推測される。このように「計画性」「情報収集力」「探究心」が高いという特徴を踏まえれば、計画的に情報を収集しながら、学部学生自身が積極的に科目履修を考え、自身の探究心を刺激することを通じて主体的にキャリア設計を行うことができる仕組みを構築することが、きわめて有益であるという結論に至った。さらに、学部において既にウェブポートフォリオを活用した学修が定着していることやスマートフォンの普及率も高く、クラブ・サークル活動の合間や合宿時においても、それらを使って即時のかつ手軽に確認ができることを想定し、ウェブツールの開発が有効であると判断された。

表 1 2011 年度 2 年次生 学部学生アンケート (n=212)

		①とても そうである	②そうである	③そうでない ときが多い	④全く そうでない	未記入	①・②の総計	③・④の総計
1. 目の前のことばかりとられず、先を見通して計画的に行動できる。	計画性	22	138	48	4	0	160	52
		10.4%	65.1%	22.6%	1.9%	0.0%	75.5%	24.5%
2. 授業に単に出席するだけでなく、予復習をするなど、授業で得た知識を自分で意識から深めようとしている。	勤勉性	5	83	108	16	0	88	124
		2.4%	39.2%	50.9%	7.5%	0.0%	41.5%	58.5%
3. 所属しているサークル・部活や自分の学部以外でも積極的に友人を作ろうとし、また実践に作っている。	社交性	49	95	54	13	1	144	87
		23.1%	44.8%	25.5%	6.1%	0.5%	87.9%	31.8%
4. 色々なことを調べる時に、インターネットだけでなく、文献などを通じて情報を収集できる。	情報収集力	30	98	73	10	1	128	83
		14.2%	46.2%	34.4%	4.7%	0.5%	60.4%	39.2%
5. 周囲の状況に合わせて言葉遣いや声の大きさを変える、態度を空けるなどの行動がいつでもできる。	倫理観・マナー	42	143	25	1	1	185	26
		19.8%	67.5%	11.8%	0.5%	0.5%	87.3%	12.3%
6. 基礎数学・基礎理科を含む理系科目を理解し、スポーツ健康科学に活用して学ぶ準備ができている。	科学的な視点	17	91	80	23	1	108	103
		8.0%	42.9%	37.7%	10.8%	0.5%	50.9%	49.8%
7. 普段から興味を持ったことを自分で積極的に調べて、様々な知識を身につけようとしている。	探究心	35	114	54	7	2	149	61
		16.5%	53.8%	25.5%	3.3%	0.9%	70.3%	28.8%
8. 英語を使って、自分の表現したいことを人にうまく伝えることができる。	英語発信力	7	65	117	22	1	72	139
		3.3%	30.7%	55.2%	10.4%	0.5%	34.0%	65.8%
9. スポーツ健康科学で学ぶ内容について入学前よりも様々な分野について興味関心が益がり学びたい内容が増えた。	学問への関心	75	111	16	8	2	186	24
		35.4%	52.4%	7.5%	3.8%	0.9%	87.7%	11.3%

4 「自分創造サポートツール SPO-KEN LEARNING GUIDE」

4.1 開発目的およびねらい

「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」(2012 年 8 月文部科学省中央教育審議会)ではグローバル化や情報化が進展し、あらゆる側面において社会的課題が発生する予測困難な時代において、課題発見・

解決に結びつける学士力を高等教育段階に身につけるため、学生の主体性を促す教育の質的転換の重要性を述べている。その中で、「はじめに個々の授業科目があるのではなく、まず学位授与の方針の下に学生の力量を育成するプログラムがあり、それぞれの授業科目がそれを支えるという構造にならなければ、個々の教員が授業の改善を図っても、学生全体が明確な目標の下で学修時間をかけて主体的に学ぶことは望めないのである。」¹⁰⁾と述べられている。学位授与方針のもとに学修構造を整理することはもちろんのこと、学部のカリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーを理解した上で学部の学びを深めるためには、学部学生がそれらの構造等に継続して触れる必要がでてくる。そのため、既にいくつかの学部学修ツールなどが集約されており、学部学生が頻繁にアクセスする学部ウェブサイト内に本ツールを構築することとなった。

なお、本ツールの開発の基礎となるスポーツ健康科学部の人材育成目的、ディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーは表2に示すとおりである。ディプロマ・ポリシーに示す力量と Semester ごとに身につけるべき所定の区分ごとの必要単位・条件を満たした 124 単位を修得することで人材育成像を達成したとみなし、学士（スポーツ健康科学）の学位を授与することとしている。また、学部の特色¹¹⁾を踏まえて、ディプロマ・ポリシーの達成につながるカリキュラム・ポリシーが設定され、それをもとに具体的なカリキュラム¹²⁾が展開されている。そのカリキュラムをもととした学部学生の学びのイメージは図1のとおりである。

表2 人材育成目的、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー

人材育成目的 (学則上に規定)	スポーツ健康科学の教育研究を通じて、グローバルな視野とリーダーシップを備え、スポーツ健康科学分野への理解を持ちつつ、社会の発展に貢献できる人間を育成すること
ディプロマ・ポリシー	①スポーツ健康に関する科学的視点や、基礎知識・基礎理論を、総合的・学際的に理解することができる。 ②幅広い教養と国際的な感覚を身に付け、グローバルな視野からスポーツ・健康を分析・検討・実践していくことができる。 ③リーダーシップ、コーチング理論への深い理解に基づいた指導を行うことができる。 ④豊かな倫理観および自らのキャリアに関する高い意識を持ち、社会の発展に自らの能力を役立てるという、強い使命感を持つことができる。 ⑤社会貢献、地域貢献等を通じて、スポーツ健康科学を社会に広めて行くことができる。
カリキュラム・ポリシー	①総合的・学際的カリキュラム ②確実に学びを深める系統的カリキュラム ③発信を重視した英語教育 ④地域や企業と連携した実践的カリキュラム ⑤4年間を通じた小集団教育

カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーへの理解を深める履修サポートツールの開発について



図1 スポーツ健康科学部の学び

4.2 構成

本ツールは、「学部概要」および「履修シミュレーション」の2つのパートで構成されている。学部概要は図2の本ツールトップページの上から4項目までの「スポーツ健康科学部の特徴」、「カリキュラム」、「学びの内容」、「履修について」、そして履修シミュレーションは最下部の「シミュレーション」をクリックすると内容を確認することができる。それぞれのパートの詳細内容は後述する。



図2 本ツール ウェブトップ画面

4.3 学部概要

学部概要は、図3のような体裁でカテゴリーごとに図等を用いた概要や副学部長による説明ムービーを設け、ビジュアル的に表現することで、スムーズな理解を促し、学部学生の学修イメージ定着化をねらっている。

「スポーツ健康科学部の特徴」は、学部学生に学部教学の理解を深めてもらうことを目的として、教育理念、教育目標、6つの学びの特色、カリキュラムなどで構成されている。

次の「カリキュラム」では、スポーツ健康科学部のカリキュラムの特徴に加えて、各科目区分でどのような力量を形成するかについて説明されている。

続いて「学びの内容」では、4年間の学びのモデル、4つのコースおよび予想される進路と関連する資格についてまとめられている。

最後に「履修について」では、履修計画の必要性、卒業に必要な単位数および履修の流れが説明され、後述の「履修シミュレーション」のパートに誘導するつくりとなっている。



図3 ウェブ学部概要画面

4.4 履修シミュレーション

履修シミュレーションは、学部学生が学部の科目を履修した場合において、その科目の特性に応じて、ディプロマ・ポリシーをもととした4つの観点（「社会の発展への貢献度」、「グローバルな視点度」、「リーダーシップ度」、「スポーツ健康科学への理解度」）の達成度が、A～Dの4段階評価（AからDになるに従い、評価は低くなる）で確認できるプログラムである。学部要卒単位である124単位を全て修得した状況における、上述4観点の到達状況とそのバランスを可視化することが可能となる。さらに、このプログラム結果において各観点に関連の深い進路も掲載し、将来のキャリアに対するイメージを持つことができるようにしている。これらの結果を学部学生自らが確認することで、既修科目や履修予定科目により身につけることができる力量と進路との関

カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーへの理解を深める履修サポートツールの開発について

連を理解し、今後の学びや諸活動を計画的に進め、学生生活をさらに充実させていくことを目標としている。

従来から掲載されている履修要項等での履修モデルの提示だけではなく、インタラクティブ性の高い履修シミュレーションができるプログラムを取り入れることで、科目履修のプロセスにおいて学部学生に科目選択に対する親近感を持たせ、自らアプローチをさせることで、主体性を促すことにつながると想定した。

履修シミュレーションのもととなる学部のカリキュラムにおいて、要卒単位 124 単位のうち「教養科目」および「必修科目・履修指定科目」はその 68 単位を占める（表 3・4）。履修シミュレーションでは、それらの科目はすでに選択しているものとして扱い、表 3 の科目区分ごとの要卒単位数を踏まえて、残りの 56 単位分の履修科目を選択できる仕組みとなっている。

表 3 科目区分と要卒単位数

科目区分		必修科目単位数	要卒単位数		
基礎科目	教養科目	－	20 以上		
	外国語科目	8	8		
基礎専門目	リテラシー科目	2	4 以上	32 以上	
	基盤科目	8	22 以上		
専門科目	コース科目（自コース）	－	10 以上	50 以上	
	コース科目（他コース）	－	14 以上		
	共通科目（キャリア形成科目等）	－			
	実習科目	コーチング実習	－		2 以上
		身体科学実習	－		2 以上
小集団科目	4	4 以上			
計		22	124		

表 4 必修科目・履修指定科目（記載のないものは 2 単位）

科目区分	科目	配当年次	
必修	外国語科目	英語 P1～4（発信型英語）（各 1 単位）	1・2
		英語 S1～4（スキル）（各 1 単位）	1・2
	リテラシー科目	日本語表現法	1
	基盤科目	基礎機能解剖論（スポーツ科学）	2
		スポーツ健康科学（健康運動科学）	1
		スポーツマネジメント論（スポーツマネジメント）	1
		コーチング論（スポーツ教育）	2
小集団科目	卒業論文（4 単位）	4	
履修指定	リテラシー科目	基礎数学	1
		基礎理科	1
		調査方法論	1
	共通科目（キャリア形成科目）	スポーツ健康科学セミナー I・II	1・2
	小集団科目	基礎演習 I・II、研究入門 I・II、専門演習 I～IV	1～4

続いて、この履修条件を踏まえて作成された履修シミュレーションの特徴を実際のウェブ画面である「科目選択画面（図4）」「コース選択画面（図5）」「4段階評価結果画面（図6）」に沿って紹介する。

まず、はじめに「科目選択画面（図4）」は、全体の要卒単位 124 単位（下記 4.4.3）と科目区分ごとの要卒単位（下記 4.4.2）を踏まえながら、科目の選択（下記 4.4.1）を行うものである。以下に詳細を述べることにする。

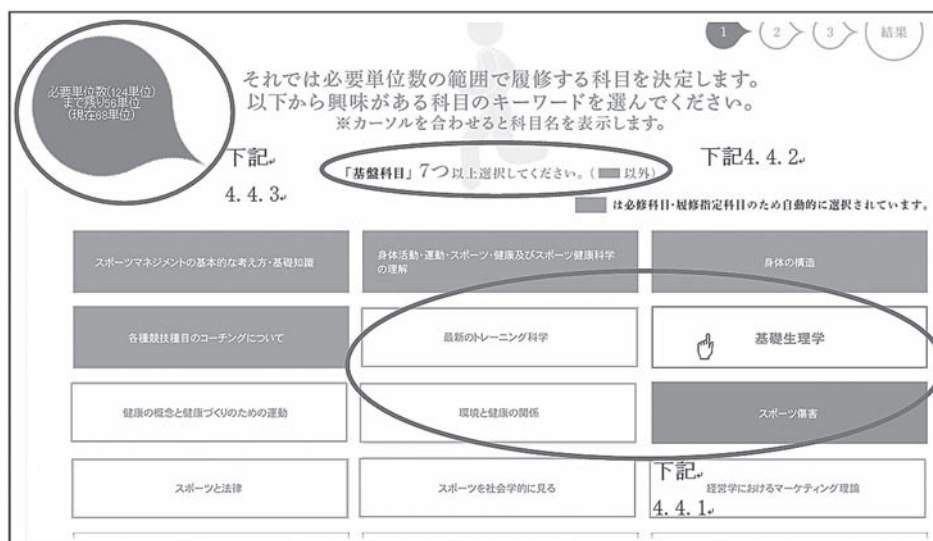


図4 ウェブ科目選択画面

4.4.1 科目選択

学部学生自身が身につけたいと思う力量を中心に選択できるように、科目の到達目標をもとに作成された身につく力量のキーワード3種類が、3列に並んでいる四角のボックスごとに順次表示されるように設計されている（図4）。また、そのボックスの上にマウスカーソルをロールオーバーした際に科目名が現れ、選択した科目のボックスについては背景色が白色から有色に変化する。なお、科目区分ごとの必修科目や履修指定科目については当初より選択された状態になっている。

4.4.2 科目区分ごとの要卒単位数

表3のとおり、科目区分ごとに要卒単位数が設定されているため、区分ごとの要卒単位に対応した科目数以上を選択する旨が表示されている（図4）。はじめの科目選択ページでは、1・2年次に履修する「基盤科目」「リテラシー科目」を選択できるようになっており、選択された科目数が必要科目数に満たない場合は、満たされるまでその旨が表示され、次のコース選択画面等に進むことができない仕組みとなっている。

カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーへの理解を深める履修サポートツールの開発について

4.4.3 登録単位数カウンター

左上に124単位の履修に向けた現段階で選択可能な残り単位数および既に選択した単位数が表示されるようになっている。124単位の科目を選択すると、124単位に到達した旨が表示されるようになっている。

4.4.4 各コースにおける専門科目の選択と要卒単位数

学部学生は、2年次までは教養科目や専門科目につながる基盤科目の履修が中心となり、3年次の進級時に4つのコース（スポーツ科学／健康運動科学／スポーツ教育／スポーツマネジメント）から1コースを選択し、コースごとの専門科目やその他の専門科目を中心に履修することとなる。表3のとおり、要卒単位数の制限上、表5に示した自コースの専門科目14単位（7科目・各2単位）の中から10単位（5科目・各2単位）以上を履修する必要があるため、図5のとおり、本ツールではコースを選択した後に、各コース専門科目を選択する仕組みとなっている。自コース10単位（5科目・各2単位）を選択した後、残りの自コース4単位（2科目・各2単位）を含むその他の専門科目から残りの科目を選択できるようになっている。

表5 各コース専門科目

スポーツ科学	エクササイズプログラミング論、スポーツトレーニング論、スポーツバイオメカニクス論、スポーツ情報解析論、スポーツ医工学、スポーツ生化学、スポーツ生理学
健康運動科学	健康増進科学、生活習慣病論、健康施策論、運動生理学、栄養教育論、特定保健指導論、運動処方論
スポーツ教育	スポーツ指導論、スポーツ政策論、スポーツ教育論、インストラクショナルデザイン論、ジュニアコーチング論、スポーツ教授学、学校保健論
スポーツマネジメント	スポーツビジネス論、スポーツマーケティング論、健康医療経済論、スポーツサービス論、スポーツメディア論、スポーツ組織論、プロスポーツマネジメント論

図5 ウェブコース選択画面

4.4.5 4段階評価

沖ら（2010）は「適切性」や「有効性」を本質とした3つのポリシーの明確化の方策として①ディプロマ・ポリシーの適切かつ具体的な表現の仕方、②シラバスに記載される各授業の到達目標を領域別あるいは観点別に示すこと、③チェック表（カリキュラム・マップ¹³⁾など）によ

るカリキュラム・ポリシーの検証、④教育効果の測定が重要であると述べている¹⁴⁾。

スポーツ健康科学部は、沖らが提唱するポリシー実質化に向けた考え方を参考にしながら独自にディプロマ・ポリシーにつながる力量を観点、項目、指標別に整理している(表6)。具体的に「観点」はディプロマ・ポリシーを4観点に落とし込んだものであり、その「観点」をもとに力量を整理したものが「項目」となる。また、その「項目」の測定を行うための「指標」を提示している。スポーツ健康科学部では、学部学生がセルフチェックシートという自己評価票を活用し、それらの「項目」における力量の修得状況を各時期に確認できる機会を設定している(表7)。

表6 ディプロマ・ポリシーをもととした自己評価項目

<<観点>>	<<項目>>	<<指標>>	<<観点>>	<<項目>>	<<指標>>
【一】社会貢献する姿勢	A:判断力	友だちや地域・社会で過ごす他の人たちに迷惑をかけないように、適切な行動がとれるようになった。	【三】リーダーシップの発揮	K:牽引力(活躍性)	何か小さなことでも、やってみたいことや自分にしかできないことに着手したり、挑戦できるようになった。
	B:キャリア開発力	たとえ途中で思い通りにならないことがあっても、自分の将来は自分で切り拓く自信がもてるようになった。		L:調整力(協調性)	課題やものごとをスムーズに進めるため、周囲からの理解や協力を得られるように調整することができるようになった。
	C:役割認識力	グループ活動などでは、自分の果たすべき役割をよく理解し、ふるまうことができるようになった。		M:人間獲得力(信頼性)	周りの人たちから相談を受けたり、判断を求められたりするようになった。
	D:役割認識力	学んだ内容や自分(たち)の研究が、地域・社会の発展にどう役立つか、具体的に説明できるようになった。		N:基盤処理力(配慮性)	グループ内でトラブルが起きて、他人の気持ちを配慮してうまく対応できるようになった。
	E:継続・粘(じん)性力	やり通さなければならない課題があるときは、どんな誘惑があっても粘り強く取り組むことができるようになった。		O:伝承力(指導性)	後輩や苦手意識のある人に、自分の知識や技術、経験をうまく伝えることができるようになった。
【二】幅広いグローバルな視点	F:多様性への許容力	自分とは異なる考えの人の話にも耳を傾け、自分の中に取り入れることができるようになった。	【四】スポーツ健康科学に対する学際的な理解	P:分野理解力	スポーツ健康科学の各分野・領域を学ぶ必要性と、そのおもしろさを感じるようになった。
	G:多様性への許容力	1つのテーマについて議論するとき、意見はバラエティに富んでいる方が楽しいと感じるようになった。		Q:分野理解力	スポーツ健康科学の各分野・領域の基礎知識を理解し、自分のことばで説明することができるようになった。
	H:表現力	国際などに関係なく、だれとでも自分から進んでコミュニケーションをとることができるようになった。		R:着眼・分析力	スポーツ健康科学で扱う現象の中に、疑問点を見つけ、深く分析することができるようになった。
	I:表現力	国内、国外で起きていることに強い関心をもち、自分なりの考えを言えるようになった。		S:着眼・分析力	問題解決のために適切な方法を選び、それを用いることができるようになった。
J:差異化力	他の人にはないような自分の強みやすぐれたところを見つけ、それを表現できるようになった。	T:学習・創造力	1つの立場・領域だけではなく、異なる分野の視点が活用できないか考えようようになった。		

表7 セルフチェックシートの実施時期

	回生	時期	実施授業(課題)
①	1	4月中旬	基礎演習Ⅰ 1~2回目
②	1	7月中旬	基礎演習Ⅰ 14~15回目
③	1	1月上旬~中旬	基礎演習Ⅱ 14~15回目
④	2	1月上旬~中旬	研究入門Ⅱ 14回目
⑤	3	9月下旬~10月上旬	専門演習Ⅱ 初回
⑥	3	1月上旬~中旬	専門演習Ⅱ 14~15回目
⑦	4	7月中旬	専門演習Ⅲ 14~15回目
⑧	4	1月上旬	専門演習Ⅳ 14~15回目

作成にあたっては、各科目で形成される「項目」の力量について、当てはまるものを「○」、そして大いに当てはまるものを「◎」に分類の上、表8のようにカリキュラム・マップ化し、配点として「○」を1点、「◎」を10点に設定し、「観点」ごとに計測ができるようにした。その後、「観点」ごとに偏りがでないように適当な係数をかけ、その点数に応じて観点ごとの4段階評価(A~D)ができるように設計した。また、最終的には、その「観点」を学部学生が理解しやすいように「社会の発展への貢献度」、「グローバルな視点度」、「リーダーシップ度」、「スポーツ健康科学への理解度」の表現に置き換え、各々において想定される進路を明示した。また、4段階評価(A~D)の結果と履修科目名を一覧表示できるようになっており、それらを印刷することも可能となっている(図6・7)。

表8 カリキュラム・マップ

	【一】社会の発展に 貢献する姿勢	【二】幅広い教養と グローバルな視点							【三】リーダーシップ の発揮					【四】スポーツ 健康科学に対する 学術的な理解						
		A : 判断力	B : キャリア開発力	C : 役割認識力	D : 役割認識力	E : 継続・朝（じん）性力	F : 多様性への許容力	G : 多様性への許容力	H : 表現力	I : 表現力	J : 差異化力	K : 牽引力（活動性）	L : 調整力（協調性）	M : 人望獲得力（信頼性）	N : 寡断処理力（配慮性）	O : 伝承力（指導性）	P : 分野理解力	Q : 分野理解力	R : 着眼・分析力	S : 着眼・分析力
	当てはまるものに○、 大いに当てはまるものに◎をお願いします。																			
後藤 一成	エクササイズプログラミング論							○								◎	◎	◎	◎	◎
後藤 一成	スポーツトレーニング論															◎	◎	○		○
後藤 一成	トレーニング科学														◎	◎	○		○	

社会の発展への貢献度 A 今後もさらに貢献する姿勢をもって活躍しましょう。

「社会の発展への貢献度」が優れている場合は、
教育・保健体育教員、公務員、NPO・NGO組織、医療関係、素材・エネルギー関係 への道があります。

グローバルな視点度 B 周囲の考えを意識して積極的に苦手なことにも挑戦してみましょう。

「グローバルな視点度」が優れている場合は、
スポーツ関連企業、健康関連企業、流通、商社、通信・IT への道があります。

リーダーシップ度 D まずは行動して課題を見つけてみましょう。

「リーダーシップ度」が優れている場合は、
マスコミ、スポーツ指導者、金融、食品メーカー への道があります。

スポーツ健康科学への理解度 A 今後もさらにスポーツ健康科学で学んだ力量を社会で活かしましょう。

「スポーツ健康科学への理解度」が優れている場合は、
大学院進学、研究所、大学教員への道があります。

< もう一度始めから
印刷する

図6 ディプロマ・ポリシー4 観点をもととしたウェブ4段階評価（A～D）結果画面

あなたが選択した履修科目は以下となります。

リテラシー科目 (10単位)		
日本語表現法	基礎数学	簿記入門
基礎理科	調査方法論	
基礎科目 (24単位)		
スポーツマネジメント論	スポーツ健康科学	基礎機能解剖論
コーチング論	トレーニング科学	基礎生理学
基礎スポーツ医学I(内科系)	スポーツ法学	リーダーシップ論
組織論	スポーツ心理学	スポーツ栄養学
コース科目 (10単位)		
スポーツビジネス論	プロスポーツマネジメント論	スポーツサービス論
スポーツマーケティング論	スポーツメディア論	

図 7 履修科目 ウェブ印刷画面

5 今後の課題

本ツールの活用は、2013年度からの試みであった。今後は2014年度に行われたカリキュラム改革に対応した展開や以下の課題に対する検討も必要である。

5.1 活用機会の充実

2013年度においては、学部学生がスポーツ健康科学部の概要を理解するとともに1年次においてどの科目を受講するかについて、自ら考えて判断できるように新入生に対して入学後のオリエンテーション時に本ツールの使い方を説明した。しかし、今後は当初の計画通り、初年次生のみならず、それ以外の学部学生においても本ツールを活用することで、既に履修した科目から身につく力量や将来像を考えることにつなげていくことが求められる。また、スポーツ健康科学部においては、先述のセルフチェックシートや自己の成長感を理解するための「学びのあしあと」¹⁵⁾（教育開発推進機構 IR プロジェクトと連携）を実施するなど学生自らの学びと成長を振り返る機会を各時期に設けており、今後、それらとの連携を果たしていくことも重要となる。その際には1年次からの継続的活用の効果とは別に、2～4年次生が本ツールを活用する上でのメ

リットを各段階に応じて明確化する必要があるだろう。例えば、2年次であれば、本格的な専門科目中心の履修に入っていき先立って、ゼミ選択も含めた自らの学習に向けた方向性を検討し、自ら判断することにつながるができる。さらに3年次であれば、卒業後の進路を見据えた学びの深化をこのツールを通じて意識させること、そして最終年次は4年間の学びのプロセスを俯瞰し、卒業論文執筆へとつなげることができるだろう。

5.2 課外活動での力量形成

沖（2007）によれば、「学生サークル活動やボランティア活動への参加をディプロマポリシー達成の一つの手段としていることについては、アメリカの学士課程教育の典型的な4つの要素（①一般教育、②主専攻・副専攻、③自由選択、④課外活動）の中にもみられるもので、ディプロマポリシーの根拠としては特段奇異なものではない。」¹⁶⁾としている。そこで、スポーツ健康科学部においても例年正課における科目の履修よりも課外活動のほうが将来の進路に対してためになっているという結果が学部学生アンケートに現れている⁷⁾ことから、ディプロマ・ポリシーに提示されている力量については、正課と課外の双方を通じて達成する考え方を導入している。しかし、あくまで本ツールは、正課面のみからの判断材料になるため、今後は課外活動面も含めた力量形成について学部学生が認識できる機会の提供を検討していくことも課題となる。評価基準等の設定は困難であると想定されるが、スポーツ健康科学部では、1時限目の前に運動・トレーニング等を行う「チーム0」や栄養調理実習室を活用し、環境・エネルギー問題を考える「RecOセミナー」、1年次生の学習面をサポートする先輩学生スタッフである「アカデミックアドバイザー」等といった学部の特徴を持った課外活動も数多く提供されている。それらと連携した力量の認識方法についても検討を深めていくことが重要となる。

5.3 個別科目から身につく力量の明示

本ツールは、4年間の科目履修の総体として、ディプロマ・ポリシーにかかわる力量を確認できるようになっている。ただし、現状では、カリキュラム・マップを公表していないため、個別の科目における力量を確認できるものとはなっておらず、それらを把握するためには、シラバスにおける科目の到達目標等を確認するように整理している。今後は、カリキュラム・マップを提示するなど、シラバスを補完する位置づけとして個別の科目ごとに、学部学生が力量を確認できる方策を検討することが課題としてあげられる。

5.4 キャリア形成につながるツール

2014年3月にスポーツ健康科学部の第1期生が卒業したことから、キャリア形成にかかわるコンテンツの検討が可能となった。例えば、卒業生が履修してきた科目から履修シミュレーションの4段階評価を確認し、社会に出た際にディプロマ・ポリシーにかかわる力量が身についている実感があるかどうか、また履修科目が社会に出た際にどのように活かしているかなどをヒアリングし、その結果と履修モデルを現役の学部学生に発信することも考えられる。そうすることで、学部学生にとってカリキュラム・ポリシーおよびディプロマ・ポリシーが社会にどのようにつながっているかをイメージできる機会となる。そのようなキャリア形成につながる履修モデル等の

提示についても今後の重要な課題となる。

6 おわりに

本ツールは、学部の教育情報を理解するためのツールの一つとして、学部学修の仕組みを理解した上でディプロマ・ポリシーにかかわる力量や将来のビジョンを深くイメージできることをコンセプトに据え、学部学生自らのアプローチにより履修シミュレーションができるように設計を工夫した。現状において大学でどのような力量を身につけたのかを実感していない学生も多い状況¹⁷⁾の中、このようなツールを通じて在学生のみならず、学部の卒業生、保護者ならびにその他社会に至るまで幅広くそれらを意識してもらうことができれば意義深い。

また、スポーツ健康科学部は2010年度に開設された新しい学部であり、かつ学内でも教職員ならびに学生数が小規模の学部ということもあり、教育開発推進機構の「学びのあしあと」¹⁵⁾の実施など、FDにかかわる学部外からの提案も積極的に受け入れやすい風土がある。また、学部の教学・学生支援等の改革に資するFDにかかわる会議等を教職員が連携して毎年実施するなど、教職協働を積極的に推進している学部でもある。今後もさらに教職員が連携することで、学生実態にあわせた積極的な活動を展開し、全学および他大学とともに優れた面や情報等を取り入れあうことで、スポーツ健康科学部はもちろん、学内外における多様なFD活動の拡がりや発展に寄与することにつなげたい。

注

- 1) 『学士課程教育の構築に向けて（答申）』文部科学省中央教育審議会、2008年、3頁。
- 2) 教育の質向上を進める各学部等の取組を財政的に支援する立命館大学内の制度であり、個別取組ごとの申請・採択制度として運用されている。本ツール開発後の2014年度本制度の継続申請結果のヒアリング所見において、本制度の主管委員会より「本ツールの取り組みは斬新であり、学生の評判や活用実態について、是非とも紹介していただきたい。」とコメントされている。
- 3) 本ツールは学部ウェブサイトを参照。(http://www.ritsumei.ac.jp/sahs/shs_guide/ 2014年12月10日)
- 4) 人材育成目的、3つのポリシーおよび教育目標は、学部ウェブサイト・履修要項を参照。(http://www.ritsumei.ac.jp/shs/introduce/policy.html/ 2014年12月10日)
- 5) 教育開発推進機構が学内7学部の学生を対象に行った学内調査『IR REPORT』No.16によれば、全体で教育目標を認知している割合が2割程度となっている。またスポーツ健康科学部の教育目標を認知している割合は7割程度であった。
- 6) 本稿の「学部学生アンケート」はスポーツ健康科学部1期生を対象とした4年間のアンケートである。その回収率は2010年度1年次生100.0% (229名/229名中) 2011年度2年次生93.8% (212名/226名中)、2012年度3年次生99.1% (221名/223名中)、2013年度4年次生94.9% (203名/214名中)である。なお、時期は各年度4月に実施し、対象者からアンケート回答段階における休学者・退学者等を除いている。
- 7) 学部学生アンケート(2012年度3年次生・2013年度4年次生)における「将来の進路に向けてためになった正課・課外活動は何ですか。(複数回答可)」という質問に対して、全員が受講する正課の必修・履修指定科目のなかで最も高いものは3年次生:英語P53.4%、4年次生:英語P46.3%、最も低いものは3年次生:基礎数学4.5%、4年次生:基礎演習7.9%。課外活動では、クラブ・サークルと回答した

ものは3年次生：64.3%、4年次生：68.0%であった。

- 8) 学部学生アンケート（2010年度1年次生）において、「学部の4つのコースの中で一番関心のあるコースはどれですか。」という質問に対して、スポーツ科学28.4%、健康運動科学10.3%、スポーツ教育28.9%、スポーツマネジメント32.3%という結果であった。また、「現時点でイメージしている将来の進路・就職先はどれですか。（複数回答可）」の質問において多い回答3つはスポーツ産業（メーカー・フィットネス）26.8%、保健体育教員17.0%、プロスポーツ組織14.8%であった。
- 9) 佐藤は「立命館大学に学ぶ約3万3千人の学生のうち、大学が把握している課外自主活動団体についてだけでも、約半数の学生が加わって活動しています。」と発表している。（佐藤敬二「正課外活動を通じた学生の成長」『父母教育後援会だより』夏号、2010年、28頁。）
福岡大学入試情報サイトにおいて「福岡大学では学術文化部会（39部1同好会）、体育部会（42部1同好会）、愛好会（95団体）があり、商学部第二部にも学術文化部会（10部）、体育部会（9部1同好会）、愛好会（2団体）が組織されている。課外活動には、全学生の36%にあたる約7,000人が参加している。」と公表している。（<http://nyushi.fukuoka-u.ac.jp/campus/club/> 2014年12月10日）
- 10) 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）』文部科学省中央教育審議会、2012年、18頁。
- 11) 立命館大学スポーツ健康科学部の特色として、文部科学省に申請した学部の設置申請書に「総合的・学際的教育」、「びわこ・くさつキャンパスの特徴を活かした教育・研究の推進」、「連携型教育・研究」、「理論と実践」、「最先端の施設・設備・機器」を記載している。
- 12) スポーツ健康科学部は文部科学省への設置申請を経て2010年4月に開設されたため、完成年度を迎えるまでの間はカリキュラムの変更を見合わせており、学部設立後4ヵ年間を経過した2014年度にカリキュラム改革を行っている。なお、本稿で述べるカリキュラムは、本ツールを作成した2013年度段階のものである。
- 13) 沖は「カリキュラム・マップは、観点別に示される各学部・学科のディプロマ・ポリシーと、同じく観点別に示される各授業の到達目標との間の整合性を明示するマトリックスである。」と解説している。（沖裕貴「観点別教育目標から考えるカリキュラム・ポリシーの構造—理念・目標、ディプロマ・ポリシー、シラバスとの関連において」『立命館高等教育研究』第7号、2007年、69頁。）
- 14) 沖裕貴ほか「一貫性構築のための3つのポリシー（DP・CP・AP）の策定方法—各大学の事例をもとに—」日本教育情報学会誌『教育情報研究』第26巻・第3号、2010年、19頁。
- 15) 教育開発推進機構 IR（Institutional Research）プロジェクトと連携して実施している学習に対する振り返りを促すツールである。2年次生と3年次生における「正課を通じて得られた成長感」と「GPA」の2つの観点から、1年間の変化を振り返り、これからの学習を計画するためのヒントとして活用することを目標としている。「正課を通じて得られた成長感」については学生本人が回答した専門的知識、問題解決能力、科学的リテラシー、コンピュータ・リテラシー、外国語運用能力、リーダーシップ、目標達成能力、感情コントロール、自己成長力、倫理的判断の10項目に対し、5段階で自己評価したものである。小集団科目の担当教員が学部学生本人にその結果を返却する際に成長した点等についてコメントをして返却することとしている。
- 16) 沖裕貴「観点別教育目標から考えるカリキュラム・ポリシーの構造—理念・目標、ディプロマ・ポリシー、シラバスとの関連において」『立命館高等教育研究』第7号、2007年、72頁。
- 17) ベネッセ教育総合研究所の調査によると「就職活動を経験した大学4年生に対する調査によると大学生活を振り返って『社会で必要な力』が養われる機会があったと回答している割合は、どの能力・スキルについても低いスコアとなった。」と明らかにしている。具体的には「大学の授業で次の能力・スキルが養われる機会があったか（大学4年生 n=1,731）」の質問に対して、問題解決力36.1%、継続的な学修力30.7%、主体性31.9%、チームワーク力44.1%、自己管理能力25.0%、課題設定力33.4%、論理的

思考力 37.6%、という結果になっている。(「学生の実態と社会で求められる力のギャップ」『VIEW21 大学版』2011 特別号 ベネッセ教育総合研究所、2011 年、10 頁。)

参考文献・資料

- 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)』文部科学省中央教育審議会、2012 年。
- 伊坂忠夫「立命館大学スポーツ健康科学部の学位授与方針」『立命館高等教育研究』第 12 号、2012 年、65-75 頁。
- 沖裕貴「観点別教育目標から考えるカリキュラム・ポリシーの構造—理念・目標、ディプロマ・ポリシー、シラバスとの関連において」『立命館高等教育研究』第 7 号、2007 年、61-74 頁。
- 沖裕貴・宮浦崇・井上史子「一貫性構築のための 3 つのポリシー (DP・CP・AP) の策定方法—各大学の事例をもとに—」日本教育情報学会誌『教育情報研究』第 26 巻・第 3 号、2010 年、17-30 頁。
- 『学士課程教育の構築に向けて(答申)』文部科学省中央教育審議会、2008 年。
- 「学生の実態と社会で求められる力のギャップ」『VIEW21 大学版』2011 特別号 ベネッセ教育総合研究所、2011 年、6-10 頁。
- 「学生は学部の教育目標を知っているのか?」『IR REPORT』No.16 立命館大学教育開発推進機構、2013 年。『学校教育法施行規則第 172 条の 2』
- 佐藤敬二「正課外活動を通じた学生の成長」『父母教育後援会だより』夏号 立命館大学父母教育後援会、2010 年、28-29 頁。
- 山本美奈「立命館大学における学士学位授与方針の作成・公開過程」『立命館高等教育研究』第 12 号、2012 年、77-87 頁。

The Development of a Web-based Tool to Help Students Understand the Curriculum Policies and the Diploma Policies: On the Basis of the Case of College of Sport and Health Science

HAYASHI Tatsunori (The Consortium of Universities in Kyoto)

Abstract

Recently, it is emphasized that students' comprehension of diploma policies is necessary for their appropriate course registration at universities. Although the recognition of these issues is becoming widespread among faculties and administrators, quite a few students still have difficulties to understand the relationship between the courses they took and the specific skills expected to acquire.

College of Sport and Health Science, Ritsumeikan University newly launched a web-based tool to help its students understand the curriculum policies and the diploma policies, titled "Course registration support tool: SPO-KEN LEARNIG GUIDE". Ritsumeikan University has been implementing financial support to unique educational projects for years. It is called "Ritsumeikan educational improvement support system", by which this web-based tool was financially supported.

This tool is expected to promote the students' understanding of what type of skills in the diploma policies are acquired through learning each subject. It aims that students become able to make a plan for appropriate course registration as well as their career by themselves, through usage of it. The objective of this paper is to explain about the purpose, development process and functions of the tool as well as to summarize issues to solve for smoother management as from 2014 school year.

Keywords

Sport and Health Science, Learning Tool, Curriculum Policies, Diploma Policies, Faculty & Administrator

